

場 所	札幌エルプラザ・ホール	開 催 日	2008年7月9日
主催者	「市民がつくる和解と平和」実行委員会	使用言語	日本語・英語
連絡先	TEL:011-706-4082 E-mail:odahiroshi@hotmail.com 文学研究科	URL	http://www13.ocn.ne.jp/~hoda/reconciliation.html

国際シンポジウム「市民がつくる和解と平和－東アジアとヨーロッパにおける持続可能な平和と市民社会の役割」



望月文学研究科長による開会挨拶

セッション1の質疑応答

このシンポジウムの目的は、歴史和解という課題に対する市民社会の役割を議論することでした。このシンポジウムの特色は、大学と市民社会との共同の企画という点です。その特色は、北海道大学サステナビリティ・ウィーク2008の関連企画であると共に、市民G8ウィークスの登録イベントであることにも表れています。またそれは実施形態にも反映していました。つまり、大学研究者と市民とが共に実行委員会を組織して、主催者の役割を担ったのです。

上記の目的を実現するために、5名の海外ゲスト（韓国2人、中国1人、ドイツ1人、オーストラリア1人）を招き、また東京からもコメンテーターが来札しました。午前10時から午後9時までの開催時間を4つのセッションに分割し、それぞれに講演、コメント、司会を配しました。

セッション1「和解の現場－北海道」では3人の市民講演者が、北海道における歴史和解の取り組みに関する具体的な報告を行ないました。それに対して本学文学研究科OB教員が歴史研究者の立場からコメントを行ないました。

セッション2「東アジアの和解と国境を越えた市民の共働」では本学文学研究科准教授による司会のもと、韓国と中国の弁護士であり市民活動家による講演と韓国大学教員によるコメントが行われました。

セッション3「ドイツの和解N G O「行動・償いの印・平和奉仕」の取り組み」ではドイツのNGO事務局長がその団体の活動について報告し、東京大学教授がコメン

トを行ないました。司会は本学文学研究科准教授が担当しました。

セッション4「市民がつくる和解と平和」ではまずオーストラリア国立大学教授の講演を聴きました。その後これまでのセッションの講演者と海外ゲストを交えて、札幌学院大学教授の司会によるパネルディスカッションを行ないました。

この長時間にわたるシンポジウムに延べ300人に及ぶ参加者が熱心に耳を傾けました。大学関係者だけでなく市民の参加者も多数に上りました。世界的に重要な歴史和解という課題について、研究者と市民とで共に企画を実施し議論するというこのシンポジウムの特色は十分に実現されました。この市民と大学との共働を形にした点が本シンポジウムの最大の成果といえます。またアンケートを見ると、G8サミットという政府首脳に光が当たる時期に、市民社会の役割に目を向いたことの意義も参加者によく理解されたようでした。

今後はこの経験を踏まえて、海外ゲストとの協力の強化、大学と市民社会との関係性の発展、歴史和解という課題に対する研究者の学問的・実践的貢献などに繋がるような企画を構想していきます。

場 所	百年記念会館、理学部大講堂	開 催 日	2008年7月10日-12日
主催者	女性研究者支援室 FResHU	使用言語	英語
連絡先	TEL:011-706-3625 E-mail:freshu@jimu.hokudai.ac.jp 女性研究者支援室	URL	http://freshu.ist.hokudai.ac.jp/english/sw_2008.html

女性科学者の持続的キャリア形成を目指して ～理系分野における男女共同参画とワークライフバランスをめぐる環境～



シンポジウム参加者

女性研究者支援室は、「サステナビリティを女性のキャリアにも」、そして「人材育成もサステナブルであってほしい」という願いを込め、3日間の国際シンポジウム「Sustainable Should be Female Scientists' Career!(女性科学者の持続的キャリア形成を目指して)」を開催しました。

国際シンポジウムではアメリカ、スイス、ドイツ、日本から研究者が女性研究者のキャリア形成について議論しました。テーマ[1]「ポジティブアクションの是非」では、女性研究者の数を増やすとどのような策が受け入れられるかについて、テーマ[2]では、先の大統領選挙で「ヒラリーはガラスの天井にヒビは入れることが出来たが、割ることは出来なかった。」との評があったのに因み、女性の進出を阻んでいる「ガラスの天井」を破るには何をすべきか、について議論しました。テーマ[3]「男性パートナーの役割」では、女性だけでなく、男性はどのように参加すべきか議論しました。テーマ[4]「研究者カップルのワークライフバランス」では、カップルが一緒に住みながら研究するのが非常に難しい状況をどう克服するかについて議論しました。研究者をパートナーにもつ割合は、男性研究者を母数にすると1割に満たないですが、女性研究者を母数にすると6割近くいます。近年、若手研究者の流動性が重要視されており、日本全国あるいは世界に舞台が広がる研究者が多い中で一緒に住むことが困難な状況にあることが背景にあります。テーマ[5]「次代を担う女性研究者を育てよう」では、北大では理系応援キャラバン隊を結成し道

内を回り中学校や高校で出前授業をしていることを紹介しつつ、今の世代だけではなく次の世代を担う研究者たちをどのように育成するためにどんなことが今必要か、について議論しました。上記5つのテーマに関する議論を最初の2日間で行いました。

最終日(3日目)は、我が国における男女共同参画とワークライフバランスの環境を考えるきっかけを作っていただいた猪口邦子衆議院議員・元内閣府特命担当大臣(少子化・男女共同参画)にお話しいただき、少子化対策として実施した様々な政策とその背景にある問題について説明していただきつつ、「責任ある地位に就いたら全力を尽くさなければならない」と励ましのお言葉をいただきました。

専門的テーマでの議論を行った最初の2日間は、それぞれ50名程度、猪口先生に特別講演をしていただいた最終日は一般市民を含め200名近くが出席し、盛会にて終了しました。



公演中の猪口邦子氏

場 所	遺伝子病制御研究所 セミナー室	開 催 日	2008年7月11日
主催者	遺伝子病制御研究所	使用言語	英語
連絡先	TEL:011-706-5070 E-mail:doublehelix@igm.hokudai.ac.jp 遺伝子病制御研究所	URL	http://www.igm.hokudai.ac.jp/english/index.html

D N A ダブルヘリックスの向こうに ～Disease free 社会実現に向けた生命科学研究の動向～



大阪大学元総長 岸本忠三教授の講演

ハーバード大学 Lewis Cantley教授

遺伝子病制御研究所は、50数年の歴史を有し、「ヒトの遺伝子病の病因、病態解明とその予防、治療法の開発」を目的として独創的、個性的な基礎研究を展開しています。

遺伝子病制御研究所の新棟開設記念行事として、研究所内の5階セミナー室において式典およびシンポジウムを開催し、続いて研究所内施設の内覧を行った後、場所を移してファカルティハウスエンレイソウにおいて祝賀会を行いました。

"Beyond the Double Helix"と題して開催された新棟開設記念シンポジウムでは、世界の第一線の生命科学をリードする日米の研究者である元大阪大学総長の岸本忠三(大阪大学大学院生命機能研究科教授)ならびにLewis Cantley(ハーバード大学医学部(Department of Systems Biology)教授をお招きし、ワトソンとクリックらのDNAダブルヘリックスの発見を超える21世紀に向けた生命科学の動向について講演していただきました。

本講演は、北海道大学サステナビリティ・ウイークの一企画として開催されました。特に若手研究者に、独創的、個性的な基礎研究を長期的視野に立って強く進め、世界の第一線で活躍できるよう、学問的そして倫理的な糧を与えることを目的としました。研究所内外からの100名を超える参加者の下で行われ、活発で学究的な意義深い討論が行われました。将来の生命科学の研究推進を担う若い学生や研究者に多くの糧を与えることができたとともに、学内外の多くの聴衆に感銘高い教育的な効果があったものと考えています。

最後に竣工式典、記念シンポジウム、内覧会、祝賀会に

ご参集頂いた関係者の皆様に心より御礼申し上げます。



Receptionでのバイオリンの演奏



遺伝子病研究所シンポジウム会場

場 所	クラーク会館 講堂	開 催 日	2008年7月11日
主催者	北海道大学サミット関連行事企画本部実行委員会	使用言語	日本語
連絡先	TEL:011-706-2093 E-mail:office1@sustain.hokudai.ac.jp 「持続可能な開発」国際戦略本部	URL	http://www.sustain.hokudai.ac.jp/sw2008/weeks/closing/index.html

サステナビリティ・ウィーク2008 クロージングシンポジウム



会場の様子

G8北海道洞爺湖サミットに合わせ開催した「サステナビリティ・ウィーク2008」が7月11日(金)のクロージングシンポジウムをもって閉幕しました。クラーク会館で行った同シンポジウムは、佐伯総長の挨拶に続き、サステナビリティ・ウィーク準備事務室長である林副理事・学術国際部長による結果報告、サミット関連行事企画本部実行委員長である本堂理事による全企画の報告及び今後の展望発表と続きました。その後、学生が行った「UNISUMMIT2008」「札幌おもてなし隊」という二つの企画の実施報告をはじめ、期間中に行われた50を数えるシンポジウムや講演会のうち9つの企画の代表者から、報告及び今後の展望が発表されました。

数値的な結果としては、期間中(注1)に実施した学術行事は50企画、講演した研究者は約300人、講演企画の参加者は6,400人、博物館展示企画への来場者は20,000人(注2)を越えました。企画の分野は、気候・環境変動や食糧、水、生態系、人材育成、平和、人権など幅広い分野にわたり、「持続可能な開発」に関して自然科学、社会科学両側面から議論が行われたことがうかがえます。また当事業のウェブサイトには、3ヶ月で27,000人がアクセスし、ウィーク中に学内に開設した臨時のインフォメーションセンターには3週間で1,800人が訪れました。また、外国報道関係者向けのプレス・ツアーや東京で記者会見を行うなど国内外への広報に力を入れたことから、新聞・雑誌等に掲載された関連記事は140以上(注3)でした。

各企画の報告に対する質疑応答の後、本堂理事は総括の中で、サステナビリティ・ウィーク2008の実施によって北海道大学の国際戦略でもある「持続可能な開発」の取り組みを国内外に広く示すことができたと評価し、「研究成果を研究者の間だけにとどめておいては、持続可能な社会は決して実現できない。」「持続可能な社会についての研究成果を広く市民と共有する意味においても、来年以降もぜひこの取り組みを持続していきたい。」と締めくくりました。これに加え総長は、本学における「持続可能な開発」分野のさらなる取り組み強化に教職員ならびに社会の協力を呼びかけ、シンポジウムは幕を閉じました。

注1:サステナビリティ・ウィーク2008に先立ち実施していた「サステナビリティ・マラソン」の今年度企画(5月~6月に実施)を含める

注2:博物館特別展示期間6月15日~8月30日

注3:2007年9月1日~2008年7月26日



学生発表

場 所	総合博物館	開 催 日	2008年6月15日-7月31日
主催者	総合博物館	使用言語	日本語・英語
連絡先	TEL:011-706-2658 E-mail:museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp 総合博物館		
			URL http://museum-sv.museum.hokudai.ac.jp/index.php

博物館展示 / 大学の知をすべての人々に！



1階 知の交流コーナー前に掲げられた英文パネル

総合博物館で行われた「大学の知をすべての人々に！」(Knowledge of University for all the People!)は、大学の知の集積地とも言える博物館において、各部屋の展示内容説明パネル及びリーフレットを英語に拡張させることにより、北大の研究を広く世界に発信する試みでした。総合博物館は国内・国外問わず様々な人が気軽にに入ることができる施設であることから、G8北海道洞爺湖サミット期間中も多様な人々が多数訪れていました。

世界共通語とされている英語での説明が各展示室前に掲示されることにより、海外からの来客を案内する際にもよい手助けになりました。

また、総合博物館リーフレット英語版の配布により、紙媒体を通して、北大のサステナビリティ研究が世界へ発信されることとなりました。

総合博物館では、各展示室前の英文説明パネル掲示、英文リーフレット配布を引き続き行い、北大研究の展示を通した世界への発信を行っていきます。



各部屋の概要説明パネルを一望(2階展示室廊下)

場 所	総合博物館 3階企画展示	開 催 日	2008年6月17日-8月30日
主催者	総合博物館	使用言語	日本語・英語
連絡先	TEL:011-706-2658 E-mail:museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp 総合博物館		http://museum-sv.museum.hokudai.ac.jp/index.php

博物館展示／洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源



展示風景:洞爺湖・有珠火山地域の概要

7月7日(月)から9日(水)に洞爺湖近郊において開催されたG8北海道洞爺湖サミット関連の企画展示として、総合博物館3階企画展示室において企画展示「洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源展」を実施しました。

洞爺湖サミットが開催された洞爺湖・有珠火山地域は、豊かな自然と資源に恵まれた場所で、過去から様々な人間活動が展開されてきた場所でもあります。そこに広がる生態系、水、火山、地質などの「自然環境」や、鉱物、エネルギー、食糧などの多様な「資源」がこれまで人間の文化や歴史を培ってきました。一方で、火山噴火や地震などの「自然災害」や人間活動によって生じた環境汚染などの「公害」等、本地域の多様で変動する自然環境と深く関わりながら共生してきた姿を縮図として展示し、改めて21世紀の人類に課せられた「環境と資源問題」を考え直すのがこの企画展示の趣旨です。

6月17日(火)のオープニング・セレモニーは、佐伯総長、本堂理事(サミット関連行事企画本部実行委員長)及び馬渡館長の出席の下で行われ、AINシュタイン・ドームの展示室入り口前でテープ・カットを行った後、各展示担当者がマスコミ報道関係者も含めた見学者に対して、それぞれの展示内容について説明を行い、大変好評でした。

展示は、生態系(プランクトン、魚類、鳥類、植物等)・水環境・地質と資源・遺跡・火山・避難生活など多岐にわたるものとなっていますが、単にパネル展示に留まらず、地形模型、衛星画像(立体画像も含む)、実物や剥製展示、

顕微鏡の設置、避難生活の再現、パソコン動画や地震計を用いた体験型の展示と多彩で、来館者にも十分楽しみながら見学して頂けるものとなっていました。

また、このほか3回にわたる関連テーマに沿った土曜市民セミナー、シンポジウム「有珠山と共に生きる」や低学年層対象の「美味しい！楽しい！火山教室」など、多数の関連イベントも実施されました。

展示構成: 1)プロローグ:洞爺湖・有珠火山地域の自然環境と資源、2)人間活動の展開、3)自然災害と環境汚染、そして復帰、4)避難生活と共生、5)エピローグ:グローバルメッセージ…環境と資源問題の未来を考える。

なお、展示ガイドブックの作成も行い関係各所に配布すると共に、展示室出口でアンケートを回収しました。



展示風景:地震・火山と避難生活

場 所	クラーク会館3階 大集会室	開 催 日	2008年6月30日-7月11日
主催者	G8市民メディアセンター札幌実行委員会、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院	使用言語	日本語・英語・中国語・韓国語
連絡先	TEL:011-807-7975 E-mail:IMCsapporo@gmail.com G8市民メディアセンター札幌	URL	http://imc-sapporo.blogspot.com

G8市民メディアセンター札幌



NGOや市民団体の定例記者会見場としても利用された

ここ数年の主要国首脳会議や世界貿易機関(WTO)といった国際会議では、市民の活動や意見を情報発信するメディアセンターの設置が一般化しています。G8北海道洞爺湖サミットにおいても、全国の独立系メディアの呼びかけで、メディア・コミュニケーション研究院とG8市民メディアセンター札幌実行委員会が協力して、北大構内に市民メディアセンターを設置しました。(市民メディアセンターはその他2か所設置)

G8北海道洞爺湖サミットをめぐっては、国際会議における市民社会の役割が益々重要になりつつある中、国内外の様々な独立メディア・オルタナティブメディアが既存のマスメディアとは異なる多様な表現に挑戦しました。日本では初といえる本格的なメディアセンター設置活動をとおして、「主流メディア」とは異なるパースペクティブと組織をもつオルタナティブメディアの可能性を確認することができました。

また、メディアセンターは非政府組織(NGO)や市民団体の交流の場としてだけでなく、国際交流を促進する貴重な施設になりました。世界各地からアクティビストや市民ジャーナリストが集まるメディアセンターは、オルタナティブメディアや市民参加型メディア、パブリックアクセスなどの思想と運動が国境を越えて広がるハブの役割を果たしたのです。

日本では市民が主体的・自発的に発信するメディアはまだ発展途上にあり、市民のアクセス権も確保されておらず、公共放送やメジャーの放送資本が強い支配力を有するするメディア環境に突き込むにはまだ微力

な状況です。

だからこそ、日本のメディア環境・政治文化の中で、オルタナティブな公共空間として市民参加型メディアをどのように位置付け、活性化していくことができるのかが、今後の課題となるでしょう。



登録者受付の様子

場 所	情報教育館 3階スタジオ型多目的中講義室	開 催 日	2008年7月3日-31日 (7月21日を除く月・木曜日8日間)
主催者	北海道大学	使用言語	日本語
連絡先	TEL:011-706-5252・FAX:011-706-7854 高等教育機能開発総合センター(学務部教務課)		http://www.hokudai.ac.jp/bureau/gakumu/koukai20.html#1

平成20年度北海道大学公開講座 「持続可能な社会と北海道発見 -地球環境と私たちの暮らし-」



山田康裕准教授「地球温暖化と私たちの生活」の講義

平成20年度北海道大学公開講座は「持続可能な社会と北海道発見－地球環境と私たちの暮らし－」をテーマとして7月3日(木)、地球環境科学研究院 山中康裕准教授「地球温暖化と私たちの生活」の講義を皮切りに、7月31日(木)、低温科学研究所 三寺史夫教授の講義「地球温暖化とオホーツク海の流氷」を締めくくりにして8回にわたり開催されました。今年度は、7月のG8北海道洞爺湖サミット開催に合わせて、本学が全学挙げて取り組んでいるサステナビリティ・ウイークの関連行事として実施し、深刻化しつつある地球温暖化が北海道の私たちの暮らしとどのように関連しているのか。環境と人間との関係を考える上で北海道という地域はどのような可能性をもっているのかについて講義を行い、毎回講師と受講者との間に熱心な質疑応答が行われました。

全回を通しての受講者が89名(募集定員100名)、1回のみの受講者は延べ2名でした。また、今年度も札幌旭丘高校との高大連携の一環として、高校生延べ20名が聴講しました。

7月17日(木)には、受講者及び生涯学習学友会会員を対象としたキャンパスツアー「生物生産農場の見学」を計画していましたが、あいにくの雨天のため中止となり、参加者40名はおよそ1時間半にわたって情報教育館スタジオ型多目的中講義室において同農場で研究に従事する大学院生による生物生産農場の取組み等の紹介を熱心に聞き入っていました。

そして今回も、昨年に引き続き7月3日(木)及び31

日(木)の講座は、西興部村と連携しインターネットを利用して、西興部村と会場である情報教育館スタジオ型多目的中講義室を結んで、双方向型の講座を行い、会場の講師・受講者と西興部村の方々との間で質問や討論を行いました。



堀口健夫准教授「環境保護における予防原則」受講者

場 所	理学部5号館講堂, クラーク会館	開 催 日	2008年6月28日-29日
主催者	UNI.SUMMIT	使用言語	日本語・英語
連絡先	E-mail:unisummit2008@gmail.com UNI.SUMMIT	URL	http://circle.cc.hokudai.ac.jp/unisummit08/

国際学生サミット「UNI.SUMMIT2008」



ブースにて説明を受ける海外生

このサミットは学生を中心とした若手活動家を集め、様々な社会問題に関して当事者意識を持ち、自らの活動テーマに基づいて活動紹介や意見交換を行うことで切磋琢磨できるネットワークを構築することを目的として開催しました。

2日間を通して参加した人数は158名であり、プロジェクトとして参加した団体は8団体ありました。環境やモノ創り、コミュニケーションなど様々な団体が集合し、それぞれの活動を紹介すると同時に今後の活動やそのテーマに沿った議題提起を行いました。議論では数多くの意見や提案が飛び交い、非常に有意義なものとなりました。

2日目のブースセッションではポスターやパンフレット、オブジェクトを交えて一般公開を行いました。大学生を中心として親子や留学生など様々な人々がサミットを訪れ、ブースで各団体の説明を受けるなど理解を深めました。

UNI.SUMMITは札幌を拠点として今後も活動を持続発展させていきます。今回は年に一度のサミットだったのに対し、次年度からは定期的な勉強会及び交流会を開催することによってさらにネットワークを広げていく予定です。勉強会では若手活動家をゲストとして招き、若者としていま何をすべきかに焦点を当てて議論を深めると同時に、いかに行動に移すかに焦点を当てていく予定です。



モノ創りに関してプレゼンをする中野代表



メンバー集合写真

場 所	札幌駅、大通公園、狸小路商店街	開 催 日	2008年6月26日-7月9日
主催者	札幌おもてなし隊	使用言語	日本語・英語
連絡先	E-mail:omotenashi08@yahoo.co.jp		

札幌おもてなし隊



全員集合(決戦式にて)

G8北海道洞爺湖サミットの開催に合わせ、札幌にもNGO関係者やメディア関係者などが訪れ、会議やデモ行進などが行われたのは記憶に新しいと思います。

「札幌おもてなし隊」は彼らにそうした活動や主張だけをして帰ってもらうのではなく、この機会におもてなしをすることで、札幌の魅力を感じてもらうことを目標に、1月より活動してきました。

札幌駅、大通公園、狸小路商店街という活動場所を手に入れ、サミット期間中におもてなし企画を実施しました。当団にはメンバーは100人近くになり、1,000人以上の外国人をおもてなしすることができました。現場に多くの笑顔が誕生し、大成功であったと感じています。

成功の要因は大きく分けて3つあります。

一つ目は、多様な学生が集まり、互いに刺激し合い活動できた事です。メンバーには様々なサークルのOB、現役の代表・幹部、またはそれらに属さず学問やバイトに精を出していた人などがありました。また、学年も新入生から修士2年生まで、大学も北大だけでなく藤女子大学や北海学園大学などの学生で構成していました。こうした違う特色をもつ学生が集い、この活動に様々な強みや機会を持ち寄り、札幌の学生力を結集することができました。

二つ目は世代や立場を超えた協力関係を多く築けた事です。この活動は札幌市を舞台とし、学生の力だけでは成立しませんでした。場所や物品の確保から企画立案に至るまで、札幌市役所、北海道大学、狸小路商店街などに支えられました。

三つ目は、外国人と直接的な触れ合いを大切にしたことです。メンバーは決して綺麗な外国語を使えませんでしたが、言葉はコミュニケーションの手段の一つで、その壁を越えて触れ合おうとする姿勢に心を動かしてくれた外国人も多かったと思います。気持ちをもって自ら一步踏み出す姿勢を持てたことが成功の一因です。

札幌おもてなし隊は7月19日(土)に解散しました。「サミットに際しての来訪者をおもてなしする」という使命は継続的ではないからです。しかし、これらの学生活動は社会に出る前の助走でもあります。札幌おもてなし隊に関わったメンバーがこの経験を将来に生かす事が、この活動の意義を深めます。その意味で真の成果はこれからです。

最後に、今回の活動は目に見える所に限らず、多くの方の支えがあり、はじめて形にすることができました。貴重な経験を得ることができたことに札幌おもてなし隊一同この場を借りて感謝いたします。ありがとうございました。



インド人ジャーナリストと交流する様子

ポスターセッション発表一覧

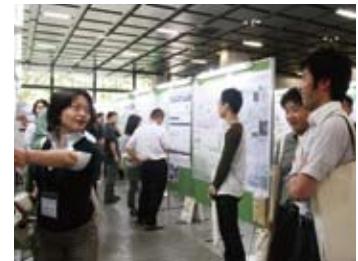


北海道大学サステナビリティ・ウィーク2008 -G8サミットラウンド-

北海道大学サステナビリティ・ウィーク2008 -G8サミットラウンド-

(P-1) Assessment of Mass Transfer Coefficient for Volume Reduction of Urine

Pahore Muhammad Masoom
Laboratory of Engineering for Sustainable Sanitation, Built Environment Div., HU



(P-2) Toxicity assessment of reclaimed wastewater

Mokhtar Guizani, Naoyuki Funamizu
Built Environment Dept., Faculty of Engineering, HU

(P-3) Descending water at the Antarctic marginal ice zone and its contribution to the Intermediate Water using an ice-ocean model

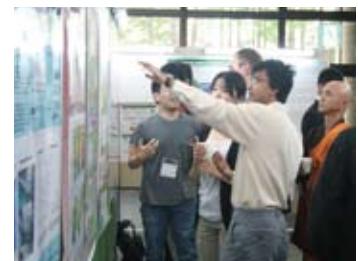
Yuri Hiraike
Graduate School of Environmental Science, HU

(P-4) Modeling of methane bubbles released from seafloor gas hydrate: Condition required for methane emission to the atmosphere

A.Yamamoto¹, Y.Yamanaka¹, E.Tajika²
1/Graduate School of Environmental Science, HU 2/Department of Earth and Planetary Science,
Graduate School of Science, The University of Tokyo

(P-5) Oceanic mechanisms that nourishes Indian Coastal fisheries

Prescilla Kurien
Graduate School of Environmental Science, HU



(P-6) Reconstruction of Past Environment for the Prediction of Future's Climate

Ho Sze-ling
Graduate School of Environmental Science, HU

(P-7) Kuroshio Extension low-frequency variability

Yousuke Nishihama
Faculty of Environmental Earth Science, HU

(P-8) Land Use and Land Cover Change in the Nepal Siwaliks: It's Environmental Implication

Motilal Ghimire
Graduate School of Environmental Science, HU

(P-9) Shifts in Interannual Sea-Ice Patterns in the Southern Ocean in Association with Large-Scale Atmospheric Modulation

Yusuke Udagawa¹, Yoshihiro Tachibana², Koji Yamazaki³
1/Graduate School of Environmental Science, HU 2/Liberal Arts Education Center, Tokai University
3/Faculty of Environmental Earth Science, HU

(P-10) Drought risk over Nepal; An environmental perspective

Madan Sigdel
Graduate School of Environmental Science, HU

(P-11) Mapping of moisture distribution for the atoca-sphagnum cover class in Sarobetsu mire using ALOS/PALSAR and AVNIR-2 data

Rei Sonobe¹, Masayuki Takada², Hiroshi Tani³, Xiufeng Wang³, Kazufumi Kobayashi²
1/Graduate School of Agriculture, HU 2/Hokkaido Institute of Environmental Science, 3/Research Faculty of Agriculture, HU

(P-12) Removal of hexavalent chromium and phosphate by alginate gel beads prepared with ferric ion.

Yoshihiro Mihara
Graduate School of Environmental Science, HU

(P-13) Recruitment pattern of the short neck clam, *Ruditapes philippinarum*, in Hichirippu Lagoon, Hokkaido, Japan

Tomohiro Komorita¹, Hiroaki Tsutsumi², Seiichiro Shibanuma¹, Toshiro Yamada³, Rumiko Kajihara¹,
Natsumi Ishimaru¹, Shiomi Hatanaka¹, Shigeru Montani¹
1/Graduate School of Environmental Science, HU 2/Faculty of Environmental and
Symbiotic Science, Prefectural University of Kumamoto, 3/Nishimuragumi Co., Ltd.



(P-14) Nitrogen dynamics of the water column in a subarctic brackish lagoon, Hichirippu-Numa, compared to eutrophic estuarine ecosystems

Natsumi Ishimaru, Seiichiro Shibanuma, Shigeru Montani
Graduate School of Environmental Science, HU

(P-15) Characteristics of phytoplankton taxonomic composition in the northwest subtropical Pacific

Young-joon Eum, Takafumi Kataoka, Koji Suzuki
Graduate School of Environmental Science, HU

- (P-16) Surface enhanced infrared absorption spectroscopic studies of absorption and reduction of nitrite on a Pt electrode**
 Farhana Rahman Rima¹, Kou Nakata², Katsuaki Shimazu²
 1/Division of Materials Science, Graduate School of Environmental Science, HU 2/Graduate School of Environmental Science, HU
- (P-17) The possibility of sustainable pest management by re-introducing bio-diversity - Simulating pest mite outbreaks & regulation in Chinese Moso bamboo plantations -**
 A.R.Chittenden¹, N.Tsujii¹, T.Ogawa², Y.X.Zhang³, Y.Saito¹
 1/Sustainability Governance Project (SGP) in the Center for Sustainability Science and Education, HU 2/Laboratory of Animal Ecology, Research Faculty of Agriculture, HU 3/Institute of Plant Protection, Fujian Academy of Agriculture, Fuzhou, China.
- (P-18) Selective elimination of lead (II) ions by polyurethane-alginate composite foams**
 Hiroaki Sone, Bunshi Fugetsu, Shunitz Tanaka
 Laboratory of Environmental Remediation, Graduate School of Environmental Science, HU
- (P-19) Effects of agricultural land use on water chemistry of mire pools in the Ishikari Peatland, northern Japan**
 Toshikazu Kizuka, Hiroyuki Yamada, Masao Yazawa, Hoi-hoon Chung
 Graduate School of Agriculture, HU
- (P-20) A study the Land-use change and soil moisture in Sanjiang Plain, China using satellite data**
 Tomoya Fukugawa¹, Yang Liu¹, Zhongxue Zhang², Xiufeng Wang¹, Hiroshi Tani¹
 1/Graduate School of Agriculture, HU 2/Northeast Agricultural University, China
- (P-21) The responses of alpine plants to the variations in snowmelt conditions**
 Yuka Kawai
 Graduate School of Environmental Science, HU
- (P-22) Development of novel hormone-detecting system using transgenic plants expressing human hormone receptors**
 Takuto Tojo
 Graduate School of Environmental Science, HU
- (P-23) Spatio-temporal changes of fish assemblage and their habitat with reference to river modification**
 Shigeya Nagayama
 Faculty of Agriculture, HU
- (P-24) Nitrogen dynamics of benthic ecosystem in subarctic brackish lagoon, Hichirippu-Numa, Hokkaido, Japan**
 Rumiko Kajiwara
 Graduate School of Environmental Science, HU
- (P-25) Vegetation Change Detection Using Thermal Infrared Emissivities Over An Arid Area; Jornada Experimental Range, New Mexico U.S.A**
 Kenta Ogawa
 Support Office for Femal Researchers, HU
- (P-26) Detail information of past atmospheric aerosols composition from bipolar ice sheets**
 Toshimitsu Sakurai¹, Yoshinori Iizuka², Shinichiro Horikawa², Shigfus Johnsen³, Dorthe Dahl-Jensen³, Jørgen Peder Steffensen³, Takeo Hondoh²
 1/Graduate School of Environmental Science, HU 2/Institute of Low Temperature Science, HU 3/Niels Bohr Institute of Astronomy, Physics and Geophysics, University of Copenhagen, Copenhagen, Denmark
- (P-27) Membrane bioreactor as treatment facility for graywater discharges**
 Aileen Huelgas, Naoyuki Funamizu
 Department of Environmental Engineering, Faculty of Engineering, HU
- (P-28) A signal of climate change in the Arctic Ocean shown in geochemical, physical, and model data**
 Hiroyasu Yamaguchi
 Graduate School of Environmental Science, HU
- (P-29) Modeling of a water balance for agricultural production responding to climate change in Bangladesh**
 Mohammed Reazul Karim
 Graduate School of Environmental Science, HU
- (P-30) Land Use Changes of Tokyo and Osaka Metropolitan Areas -Visualization by grid data-**
 Yayumi Abe¹, Akio Yamashita², Kiyoshi Takaokaoku³
 1/EnVision Conservation Office, 2/Department of Regional Environmental Studies, Rakuno Gakuen University, 3/SANCOH Co., Ltd.
- (P-31) Mono-dispersed single-walled carbon nanotubes as the key-elements for creation of environmental-frendly, transparent and electrical-conductive films**
 Hongwen Yu¹, Bunshi Fugetsu²
 1/Graduate School of Environmental Science, HU 2/Faculty of Environmental Earth Science, HU

- (P-32) Removal of bacteriophages and norovirus virus-like particles by coagulation-sand filtration process**
Nobutaka Shirasaki
Division of Built Environment, Graduate School of Engineering, HU
- (P-33) Sea cucumber larval metamorphosis by neurotransmitters**
Hiroshi Matsuura¹, Ikuko Yazaki², Tatsufumi Okino³
1/Graduate School of Environmental Science, HU 2/Tokyo Metropolitan University, Tokyo 3/Faculty of Environmental Earth Science, HU
- (P-34) Habitat selection of three sympatric Myotis species in agricultural landscape**
Takumi Akasaka
Graduate School of Agriculture, HU
- (P-35) Tree Selection for Nests and Roosts of Japanese Pygmy Woodpecker Dendrocopos kizuki**
Kanomi Shiina
Graduate School of Environmental Science, HU
- (P-36) Importance of rpoS in Escherichia coli biofilms**
Akinobu Ito
Graduate School of Engineering, HU
- (P-37) Importance of a natural F-plasmid in Escherichia coli biofilm formation**
Thithiwat May, Satoshi Okabe
Laboratory of Water Quality Control Engineering, Graduate School of Engineering, HU
- (P-38) Characteristics of nitrogen removal and microbial community in an up-flow granular bed anammox reactor**
Sunja Cho, Naoki Fujii, Yoshitaka Takahashi, Masaki Shimokawa, Satoshi Okabe
Laboratory of Water Quality Control Engineering, Division of Built Environment, The Graduate School of Engineering, HU
- (P-39) Performance and bacterial community structure of continuous two-chambered microbial fuel cells**
Kyungmi Chung¹, Keiichi Kumano², Satoshi Okabe²
1/Division of Built Engineering, Graduate School of Engineering, HU 2/HU
- (P-40) Differentiation in crown architecture among 200 tree species in a lowland rainforest, Peninsula Malaysia**
Yoshiko Yazawa¹, Takashi Kohyama², Taku Kubo², Abd Rahman Kassim³, Matthew D. Potts⁴
1/Graduate School of Environmental Science, HU 2/Graduate School of Environmental Earth Science, HU 3/Forest Research Institute Malaysia (FRIM), 4/University of Miami
- (P-41) Influence of operating conditions on physically irreversible fouling in submerged MBRs**
Taro Miyoshi, Takuro Naruse, Rie Ogyu, Katsuki Kimura, Yoshimasa Watanabe
Department of Built Environment, HU
- (P-42) Submicron powdered activated carbon effectively removes geosmin from water - effect of particle size on removal**
Naoya Ando, Yoshihiko Matsui, Taku Matsushita, Koichi Ohno, Hiroshi Sasaki
Division of Built Environment, Graduate School of Engineering, HU
- (P-43) A Signal of climate change in the Arctic Ocean shown in geochemical, physical, and model data**
Hiroyasu Yamaguchi, Motoyoshi Ikeda, Takayoshi Ikeda
Faculty of Environmental Earth Science, HU
- (P-44) Toxicity of herbicide glyphosate to HepG2 cell line by using Human DNA Microarray analysis**
Jintana Wongta
Department of Urban and Environmental Engineering, Faculty of Engineering, HU
- (P-45) Why are frogs sleeping in? - Relationship between climate change and frog phenology -**
Kotaro Takai
Graduate School of Environmental Science, HU
- (P-46) Assessment of Onsite Wastewater Differential Treatment System in the Otane River in Chichibu**
Kango Itoh, Ryusei Ito, Naoyuki Funamizu
Faculty of Engineering, HU
- (P-47) Components that affect physically reversible fouling in mixed liquor suspended solid in membrane bioreactors (MBRs)**
Tomoo Tsuyuhara
Faculty of Engineering, HU
- (P-48) The role of Pleistocene refugia in shaping genetic diversity of Japanese hare (*Lepus brachyrurus*)**
Mitsuo Nunome
Graduate School of Environmental Science, HU

インフォメーションセンター活動報告



北海道大学サステナビリティ・ウィーク2008 -G8サミットラウンド-

インフォメーションセンター

設置日時:6月22日~7月11日 場所:学術交流会館正面入り口前

北海道大学はサステナビリティ・ウィーク2008の開催に合わせ、学術交流会館前にログハウス風のインフォメーションセンターを設置し、約3週間にわたり来場者への様々なサービスを提供しました。スタッフは28名の北大生ボランティアと6名の市民通訳ボランティアで構成され、常時2名のスタッフが対応しました。

インフォメーションセンターでは主な活動として、サステナビリティ・ウィーク2008への参加者・各研究施設への来訪者・観光客に対する学内案内・観光案内等のサポート業務、各種広報物・パンフレットの配布やポスターの掲示、そして「Opinion Pod」を介しての意見収集がおこなわれました。期間中は一日平均90人、3週間で約1,800人がインフォメーションセンターを訪れ、シンポジウムや講座等の情報や会場の案内、観光案内などのサービスを利用しました。また、「持続可能な社会」について来場者にも一緒に考えてもらうことを目指して設置した意見収集システム「Opinion Pod」には、スタッフが来場者へ積極的に声をかけた結果、210件の意見が集まりました。それらの意見は現在もウェブサイトで公開されています。さらに、インフォメーションセンター内に設置された北大グッズ販売ブースは、お土産を買う多くのシンポジウム参加者や観光客で賑わいました。

今回の活動では、サステナビリティ・ウィーク2008参加者や来訪者・観光客への全学的なサービスを提供出来たほか、ボランティアで参加した学生にとっても、市民ボランティアや国内・外からの多様な来学者と触れ合う良い機会となりました。活動に参加した学生からは、「持続可能性について考える良いきっかけになった」、「英語学習への刺激となった」、「コミュニケーション能力が付いた」などの感想が寄せられ、次回も活動に参加したいと答えた学生は9割以上に上りました。また、インフォメーションセンターの常設を求める声も上がるなど、スタッフと来場者だけではなく、大学全体としても非常に有意義な活動となりました。



インフォメーションセンター 外観図



来訪者に積極的に声をかける学生ボランティア



Opinion Podに寄せられた意見

広報活動報告



北海道大学サステナビリティ・ウィーク2008 -G8サミットラウンド-

サステナビリティ・ウィーク2008の広報活動

サステナビリティ・ウィーク2008では、その開催と概要を多くの人に知ってもらうために幅広い広報活動を展開しました。

まずは学外に広く周知するため、記者会見およびプレスリリースによる報道機関への情報提供をはじめ、全国または全道をカバーする新聞への広告掲載、和英のウェブサイトからの情報発信、他の大学や研究機関へのポスターやプログラムの配布を行いました。また国際的な広報としては、国外からの来場者や来賓、各国大使館等への英語版ポスターや英語対応DVD、英文パンフレットの配布を行い、「持続可能な開発」に関する分野を中心に北海道大学の教育・研究を広く紹介しました。

一方で学内に向けては、正門およびメインストリートへの横断幕掲揚、構内循環バス車体へのステッカー貼付による告知をはじめとして、オリジナルうちわの配布、学内各食堂への卓上POP設置等で、教職員および学生に本イベント開催を周知しました。さらに開催直前には、教務情報システムのインフォメーション機能やチラシなどを活用し、積極的な参加を促しました。

その結果、北海道大学が「持続可能な社会の実現」に向けた活動を重点的に行っていることを多くの参加者に周知することができました。



横断幕



構内循環バスステッカー



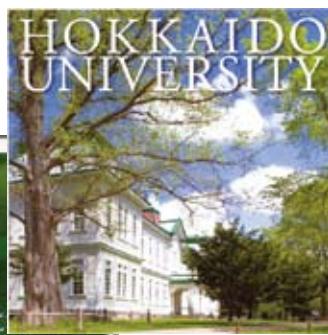
学食に設置した
卓上POP



オリジナルうちわ



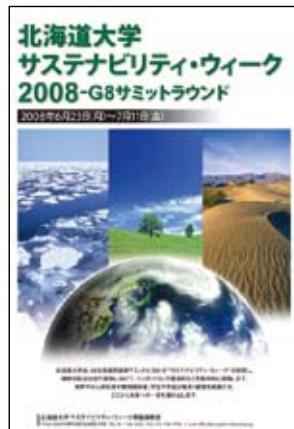
北大紹介DVD



英語版北大紹介冊子



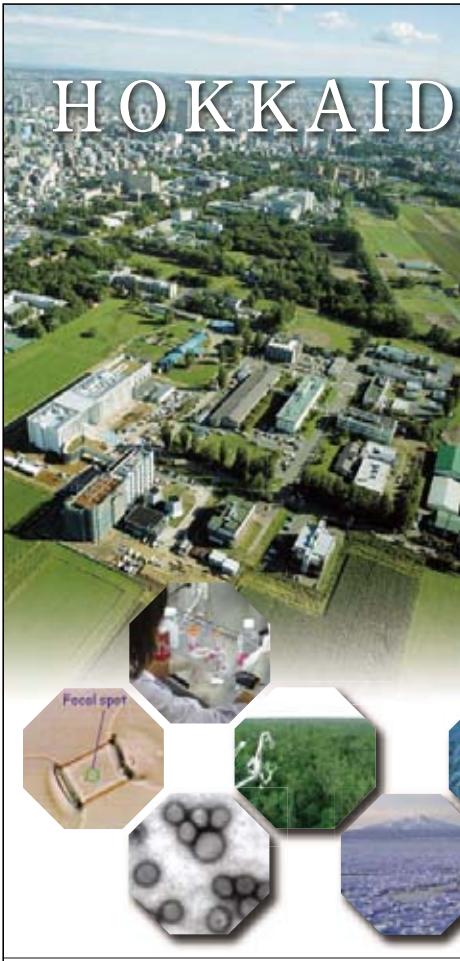
ポスター



プログラム

新聞廣告

北海道新聞別刷りタブロイド版（6/23（月）朝刊折込、国際メディアセンターなどで配布）



HOKKAIDO UNIVERSITY

Shaping the Future 未来を切り拓く「知」と「創造」

Hokkaido University (HU) is creating new wisdom to shape the future, by mobilizing knowledge acquired in its history. HU has been dedicated to research and educational programs that will contribute to the realization of sustainable development, with its remarkable achievements and knowledge accumulation in a broad range of academic fields.

北海道大学は130余年にわたる歴史のなかで培われた「知」を結集し、未来を切り拓く新たな叡智を「創造」とともに、最先端の研究・教育を担う使命を負ったすべく、「持続可能な開発」に貢献する研究と教育に力を尽しています。本学では、持続可能な社会づくりの基礎となる広範な学問領域において、十分な実績と蓄積があり、その中でも代表的な領域は次の5つです。

Global warming
地球温暖化

Integrated water management
水の統合的管理

Establishment of a recycling-oriented community
循環型社会の構築

Measures against infectious diseases
感染症対策

The stabilized securement of food and forest
食糧・森林の安定的確保

HU is promoting interdisciplinary research and educational programs while integrating the abovementioned five fields with other fields to tackle complicated challenges which prevent society from being sustainable. Furthermore, HU established a project named Hokkaido University Initiative for Sustainable Development (HUISD) with an aim to strengthen research and education for our sustainable future.

北海道大学は、これらを独立した学問領域と捉えるのではなく、他の領域とも互いに重ね合わせながら、学術的な研究・教育活動を行っています。さらに、大学経営面においては、持続可能な社会づくりに向けた大学運営を実践するとともに、「持続可能な開発」国際戦略本部を設置し、研究・教育環境の整備に努めています。



In the three weeks,
researchers and citizens will gather in
Hokkaido University and discuss
the future of the earth and humanity.

"Sustainability Weeks 2008" refers to a campaign Hokkaido University, Japan has launched in late June until early July 2008 just prior to the G8 Hokkaido Toyako Summit. During the campaign, HU will intensively hold over 30 international symposia and outreach programs thereby providing researchers, educators, students and citizens around the world with opportunities to bring together their knowledge and wisdom to address challenges for the creation of a sustainable society. Through these events, Hokkaido University will deepen its partnerships with the individuals and organizations that will assemble here and take a step toward the future.

世界の研究者や市民が、
北海道大学に集まって
地球と人類の未来を考える3週間。

サステナビリティ・ウィーク2008は、「持続可能な社会」の実現に貢献する研究と教育を推進するために、北海道大学が主催する事業です。これは、地球環境問題を話し合う「G8 北海道洞爺湖サミット」に先駆けて、6ヶ月前から7ヶ月間に開催する、いわば、「持続可能な社会づくり」に向けた研究・教育の推進強化週間です。この期間には、30以上の国際シンポジウムや市民向け講座などを集中的に開催し、研究や教育を勵む世界の人々が、持続可能な社会の実現を目指して叡智を結集させる機会を提供します。これらサステナビリティ・ウィーク2008の事業を通じて北海道大学は、ここに集う個人や機関と連携を深め、未来への歩みを踏み出します。



Summaries by Categories カテゴリー別にみるイベント概要

Climate/Environmental Changes 気候・環境変動

We report on the results of observations, research, and predictions of the impacts of extraordinary climate change on a global scale, including global warming. We also sponsor symposia where researchers and citizens can discuss what to do about the environment.

地球温暖化とはひとつの複雑な気象変化に関する全地球規模の観測・研究成績や影響の予測について報告することに、私たちが今何をするべきかについて、研究者と市民と一緒に考えますシボジウムなどを開催します。

Intellectual and Technological Innovations and Social Changes 知的革命、技術革新、社会変革
We report on research on new technologies to produce the bio-energy, fuel cells, etc. required for sustainable development. We also discuss how social and economic changes shall take place. We also host world conferences on catalyst research, a field expected to promote innovative technological development.

持続可能な開発を行うために必要なバイオエネルギー生産や燃料電池など新技術の研究報告とともに、社会や生活をどう変革をすべきかを議論します。革新的技術開発が期待される触媒研究の世界会議を行います。

Natural History, Bio-Diversity and Natural Preservation 自然史、生物多様性、自然保護
We report on academic studies to find the roots of bio-diversity in nature and studies on taxonomy to help classify and understand bio-diversity in a systematic manner. We also organize symposia to contemplate the meaning and importance of life and the abundance of nature in today's rapidly changing natural and social environments.

自然についての根柢ある生物多様性の成立の根柢を追求する学問や、その多様性を体系的に整理し理解するための分子生物学を紹介。変化する自然環境と社会環境の中で、真の豊かな生活について考えるシンポジウムも開催します。

Food, Water, Hygiene and Health 食糧・水・衛生・健康

Amid the ongoing growth of the global population, we discuss fundamental issues for our lives, including agricultural and marine resource control, production technologies required to secure food resources, issues related to food, health, water hygiene, and other conditions indispensable for agricultural production and our lives.

世界人口が増加続ける中で、農業や漁業において食資源を安定確保するための資源管理や生産技術のほか、食と健康の関係や、農業や暮らしに欠かせない水の衛生管理など、人が生きていくための根源的なテーマに取り組みます。

Education, Human Resources Development and Enlightenment 教育、人材育成、啓発
We discuss and report on the development of human resources, including the creation of an educational environment for a sustainable society and the creation of a working environment where female scientists can pursue sustainable career paths. We also report environmental preservation efforts by Hokkaido University.

人々が持続可能な社会を未来にわたって育み続けるための教育環境や、女性科学者が持続的なキャリア形成を行うための基礎環境の在り方など、人材育成をテーマに議論や発表を行います。

Human Rights, Culture and Peace 人権・文化・平和

We discuss issues of cultural and social development, including peace and cooperation and issues related to regional cultural promotion in modern international society. We also hold a symposium to discuss the meaning of "the End of the Cold War" from comparative regional perspectives using new documents collected from around the world.

近現代における國際社会における平和と協調、地域文化振興のための課題など、文化・社会発展について議論。世界規模で収集された新しい資料と地域間比較の視角を用いて「冷戦の終わり」の意味を探るシンポジウムなどを行います。

For more information, contact the Hokkaido University Secretariat for Sustainability Weeks.
この広告に関する詳しいお問い合わせは、北海道大学サステナビリティ・ウィーク準備事務室まで

Phone: +81-11-7062093
日本国内からの発信: 011-706-2093
Address: Kita 8, Nishi 5, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido 060-0808

<http://sw2008.jp/>
E-mail: g8kikaku@general.hokudai.ac.jp

6/23 (月) 朝日新聞朝刊 (全国版)

6/22 (日) 北海道新聞朝刊

二酸化炭素などの温室効果ガスの排出を抑えて、地球環境に配慮した社会のこと。

6/29 (日) 北海道新聞朝刊

カーボン オフセット

7/6 (日) 北海道新聞朝刊

バイオマス　【はいօմす】 動植物から生まれた再生可能有機性資源。トウモロコシやイモなどの作物も利用できるが、家畜のふんや生ごみ、穀わらなど食料と競合しない資源の利用が叫ばれている。

7/13 (日) 北海道新聞朝刊

生物多様性

【せいぶつたようせい】

6/7 (土) 北海道新聞朝刊

北海道大学
HOKKAIDO UNIVERSITY

SUSTAINABILITY WEEKS 2008 -G8 Summit Round- 6.23MON~7.11FRI

第1回 サステナビリティってそうなんだ！ 地球はひとつ。だからつながってるんだ

このままじゃ持続不可能！ 地球と社会

最近よくテレビで「持続可能性」なんて言葉が出てきます。これは、地球や人々の命のための先の生き残り、ちゃんと「存続」される可能性」のことですが、そのままでいることは存続されないのでしょうか？ 温暖化や貧困や環境や社会の中できさなき問題が起こっているいま、地球や人々の命の未来は不安がいっぱいです。それらの問題と向き合って、地球や人々が命がずっと先の未来で暮らしていくためのキーワード、それがサステナビリティ（サステ）なのです。

エコだけじゃなくて、地球全体を考えよう

石油や炭を燃やすと、温暖化が進み、海面などの水が熱めて海面が上昇するといわれています。さらに、海水の温度が上がってから気温が大きくなり、一年の生産が絶滅の危機にさらされたり、マリンなどの病害が蔓延したり、魚が死んでしまったり、水不足に悩んだり水質が悪化したりなど、さまざまな影響が現れています。そこで、石油などの燃費で熱を持った「資源」を大気中に放出するのではなくて、地中に入れたえ水を熱して熱を持たせ、アリバニアでは、うつロゴンシャやアカバエノイロという肥料作戦を始めました。すると、食用肉が減って、インフレがなくなり、牛の頭の大きさが上りはじめて、また、人間が育まれた大きな他の動物たちも価値が上がり、わたしたちの生活にも大きな影響があります。やっぱ世界の急激な変化がながなが、特に「G8」はこの歴史的展望展に人々を苦しめています。

このように、地球上で起こっているできごとは全部つながっていて、何をすればどこかで影響を与える。だらさざれを抑制して、環境や経済も一緒に考えながら未来の社会を作っていくこういうのがサステナの大切な考え方です。

身近な「ロハス」も、実はサステナなんだ！

女性誌の特集などで見かける「ロハス」。健康で豊かな自然のライフスタイルと何とななく思っている人は多いかもしれません。実は、ロハスはLifestyle of Health and Sustainabilityの略語で、「健康で持続可能なライフスタイル」という意味。自分も地球もずっと健康でいられる方法を考えながら暮らし、といふ考え方です。たとえば、おなかががくがくしたからラフラフするように、地図、どこかに手を掛けるように別のどこかに影響を与えるのです。

次に、實物を触るとき、ごみを捨てるとき、コンテンのスタイルを取るとき、サステナのことを思い出して、そして考えてみましょう。たといたこの地球で起こっているできごとは、全部つながっているんだということ。

第2回(6/16㈯)は「地球は温暖化って、そうなんだ！」

世界の研究者や市民が北海道大学に集まって
地球と人類の未来を考える3週間

2008.6.23MON~7.11FRI

北海道大学でG8各団体の首脳陣がサミットに合わせて「サステナビリティ・ウィーク」を設置し、持続可能な社会に向けて、シンポジウムや講演会などを集中して開催します。ここで紹介するのは、学生や市民の方にも参加していただけるプログラム。未来のためにできることを考えませんか？

PRIDE EVENT① 地球温暖化

日本政府の最新動向と議論セッション

6.25(MED)

午後1時半～3時半
参加料：無料

主催：北海道大学 外国語文化教育センター(准教授 江口泰子氏と准教授 木下敦氏)

E-mail: pride@edu.hokudai.ac.jp

FAX: 03-3403-6224

<http://www.hokudai.ac.jp/~pride/>

PRIDE EVENT② 燃料電池

エネルギーをもうかる技術セミナー

6.28(FRI)

午前10時半～12時半
参加料：無料

主催：北海道大学 外国語文化教育センター(准教授 江口泰子氏と准教授 木下敦氏)

E-mail: pride@edu.hokudai.ac.jp

FAX: 03-3403-6224

<http://www.hokudai.ac.jp/~pride/>

入場料：無料

定員：無制限

会場：

北海道大学

6/16 (月) 北海道新聞朝刊

北海道大学
HOKKAIDO UNIVERSITY

SUSTAINABILITY WEEKS 2008・G8 Summit Round → 6.23MON-7.11FRI

第2回 地球温暖化って、そなんだ！
たったの0.74℃。大したことない？ 温暖化

年平均気温約0.74℃上升で「微熱」の地球

「日本が1℃かかった！」などと話題に聞いたら、あんまり思ひますか？
昨日より今の日本の気温はたったの0.74℃高かったといいで、あまり大きな差を感じませんね。でも、人の体温が上がったら、立派な微熱。
ちなみに、2008年の東京年の平均気温は16.9℃、九州では宮崎県
は17.9℃。つまり、年間平均気温が1℃上がるだけで、東京は吉ぬきにな
南国になくなってしまうのです。

地球全体の年平均気温、1900年から2000年までの100年で一気に
0.74℃上昇。日本の年平均気温は0.74℃上昇っています。そしてなんと、
私たちも住む北海道・札幌市では都市化の影響もあり、0.73℃も上昇。
これは、もしもの世界競争が競争ば、札幌が東北地方のような気温になると、
どうなるのか変化です。この100年の傾いた、地球の気候はこんなに変わ
っているのです。

石狩鍋が食べられないくなっちゃう？

「でここは北海道、多道退化したのは、冬の夜さら解放
されちゃうかな？」といはるくらい。このまま気候が進んで
これから100年後、北海道の温泉はもう上昇する? 予測をみて、
地熱や動植物、社会への影響を試す。そして、北海道名物・石狩
鍋の材料であるカツオの、百年後には北海道内に遅くなる? く
とも予測されています。すでに北海道ではがけ出でてヒョウヨクマの
生食が食べれないなり。温泉が私たちの健康や農作物にダメージを及ぶ、

水不足や水資源の需給を示している
今まさに水資源が豊富に見える
と、台風・大雨・干ばつなどの極
端な現象が頻繁に現れるのでは
ないかという配慮を加えて、マ
リアなどの伝統文化が半球に
また広まるとなるとおもふられて
いるのです。

それそれが、それそれのSTOP! 地球温暖化

G8北海道洞爺湖サミットでの先進国同士の話し合い、企業の温室効果ガス削減の取り組み、そして研究者による気候の分析と技術開発。
たとえば北海道大学では、地球温暖化による気候の変化に敏感な「地
球環境のセンサー」で呼ばれる薄いホーリングの海水や水蒸気を定期的に
測定するプロジェクト。アリゾナは同じく多くの国内外の大大学や研究
機関と協力して進めています。

けれど、まずは私たちの行動で何をしていけばいいか、身近な温暖化対策。今日
は天気がいいから車や自転車でどこか遠くの夜は家族が集
まってる時の宿の固めやテレビを見て楽しむんよ」とか、帰宅とともに
暮らすことって、じつは暮らし心地が楽しむことのかも知れませんね。

【9時21分(19分予想)は福岡市の社会の発展って、そなんだ!!】

サステナビリティ
WEEKS
SUSTAINABILITY WEEKS

サステナ
ビリティ
そうなんだ！

世界の研究者や市民が北海道大学に集まって
地球と人類の未来を考える3週間

北海道大学 サステナビリティ ウイーク2008 G8サミットラウンド

2008.6.23 MON → 7.11 FRI

北海道大学はG8北海道洞爺湖サミットに合わせてサステナビリティ・ウイークを実施し、持続可能な
社会に向かって、シンポジウムや公演などを重ねて積極的に開催します。ここで紹介するのは、学生や
市民の方にも参考にしていただけるプログラムです。今までのめでることと一緒に考えませんか?

【6月28日】
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
【6月29日】
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
【6月30日】
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
【7月1日】
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
【7月2日】
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
【7月3日】
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
【7月4日】
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
【7月5日】
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
【7月6日】
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
【7月7日】
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
【7月8日】
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
【7月9日】
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
【7月10日】
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
【7月11日】
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式
北海道大学サステナビリティ・ウイーク開幕式

【主な会場】
北海道大学本部会議室、北海道大学本部会議室、札幌市中央区北6条西5丁目
http://www.sus.w.u-tokyo.ac.jp/fish
TEL 011-321-5605

【主な会場】
札幌市中央区北6条西5丁目
http://cosmo.sus.u-tokyo.ac.jp/2008
TEL 011-321-5605

【主な会場】
札幌市中央区北6条西5丁目
http://cosmo.sus.u-tokyo.ac.jp/2008
TEL 011-321-5605

北海道新聞朝刊

6/23 (月) 北海道新聞朝刊

北海道大学
HOKKAIDO UNIVERSITY

SUSTAINABILITY WEEKS 2008 -G8 Summit Round- 6.23(MON)-7.11(FRI)

北海道大学

サステナビリティ ウイーク2008

G8サミットラウンド

世界の研究者や市民が北海道大学に集まつて

地球と人類の未来を考える3週間

第4回 生物多様性って、そうなんだ!

みんなつながってるから、みんな必要なんだ

サンゴが死滅すると、海の生物が危ない?

シカタマ、ホムカラマ、木華、ミニコロ、パラリコト…私たちが住むこの地球上には、人間のほかにも、本当にたくさんの生き物が生息している。このような生物が種として存在する現象を「生物多様性」と呼びます。しかし21世紀を代表する課題である環境問題は、物种の多様性をも脅かす。物种の多様性を保つことで、物种の多様性が進歩して人間の生活が豊かになる一方で、同じ地球上に生息する多くの生物が絶滅し、生物の多样性に大きなダメージを与えることにならなかったのです。

さあまさに生物多様性が海へと吸いこまれてしまう原因は、温暖化や森林破壊です。温暖化による海水温上昇と「魚」の姿を失いつつあるサンゴ礁のことです。サンゴ礁は海中のCO₂の吸收装置です。サンゴ礁として海に生き残るために豊かな生態系を保つています。ところなくなるといふことは、やはり生物たちの命の危険にさらられるといふことです。同じように、海底石炭なども物种の絶滅によって進歩していく現象が恐がる事無く、熱帯雨林の砂漠、高緯度など、地球上のさまざまな環境で起きているのです。

乱獲で消えたアザラシ、そしてアラグマ

先日アメリカの報道大手が、長年にわたりアザラシの繁殖を防ぐリモコンケータンガを設置してしまった、しかし、その活動によって絶滅した最初のアザラシの種類となるなどといわれています。

乱獲の元凶は人の行動「生物多様性の喪失」を招いている例がけであります。それは、輸入への対応で見られる外食文化の進歩、外食文化とは、もともとその地域には生息していたなかったものの手でそぞら待ち込

まいたり、また飲んでいたりした動物です。たとえば、北海道のカバウツトとして持つ捕まえたライマ。捨つたり動物園から放り出され野生化し、ひととて生じているニシキギザルなど、食べつくつクロフの餌を喰らひながらと闘なっています。同じくアメリカでよく見られるラブバグが釣り上げられ、放り出されたラブバグが釣りよ

れる波浪などで急速に広げて、日本の川に様々な小型の魚や水中生物を食べてしまうなど、人間と別の領域から動物たちを込んだ結果、本来の生態系を壊し、生物多様性に大きなダメージを与えているのです。

すべての生物がいて、ひどい地球なんだ

北海道大学では6月15日、外食生物多様性を取あわせシゴジムが行われました。外食生物多様性に関する会議のなかで、みんなが考えようとしたうえで、資源や循環、持続可能な社会、生物多様性をめぐらしくなっている現状は、どちらも関連の話題が交わされています。すべての地球の生物は、資源(つまり食べられるもの)、争い(たたかわら)、互い影響をもとに暮らしています。この資源をもたらせるために、ひとつひとつこの「資源の支架」を、わたしたちひとりがどうがんばって行動していくなければならないのです。少ないくらいは、問題は減伐地帯に指定されてしまうかもしれません。けれど、ひとつの種なのですから。

*ミスラニアについて: 6.07(BUW)の講演で貢献をお読みください。

*最終日(6/30予定)は「絆を張ってそうなん!」

2008.6.23(MON)-7.11(FRI)

北海道大学はG8北海道開拓サミットに合わせて「サステナビリティ・ウイーク」を実施し、持続可能な社会に向けて、シンポジウムや講演会などを集中的に開催します。ここで紹介するのは、学生や市民の方々にも参考していただけるプログラムです。お来るのにめでることと一緒に御見えませんか?

FUTURE EVENT #1

八幡校舎開業記念
新・自然エネルギー創成
「エネルギーと資源の循環・創造」

八幡校舎開業記念
新・自然エネルギー創成
「エネルギーと資源の循環・創造」

6月27日(火)
13時00分-13時50分
八幡校舎開業記念
新・自然エネルギー創成
「エネルギーと資源の循環・創造」

6月28日(水)
13時00分-13時50分
八幡校舎開業記念
新・自然エネルギー創成
「エネルギーと資源の循環・創造」

6月29日(木)
13時00分-13時50分
八幡校舎開業記念
新・自然エネルギー創成
「エネルギーと資源の循環・創造」

6月30日(金)
13時00分-13時50分
八幡校舎開業記念
新・自然エネルギー創成
「エネルギーと資源の循環・創造」

0/30 (月) 北海道新聞朝刊

北海道大学

北海道大学

サステナビリティ ウイーク2008

G8サミットラウンド

世界の研究者や市民が北海道大学に集まつて
地球と人類の未来を考える3週間

6回 文化的なサステナビリティ

愛は地域を救う？文化と地域の二人三脚

文化は地域発展に欠かせないパートナー

芸術やイベントなど、いろいろな文化活動の発展は、地域の発展に深く関係しています。例えば北海道では、東川の「写真町」、というキャラクタープレスによるとおおむね2000年で復活した夕張市の「夕張」(国際ファンクションズ・マチタウン)など、地域発展と文化活動が強く結び合っています。北海道では、7月5日(土)「地域の資源は文化から」という題目でシンポジウムを開催し、文化と地場産業が豊かに、持続的に関わり合うを考えるなど、テーマで講演を行いました。自治体の歴史文化などで独自の努力が求められているから、文化と地場産業に発展し続ける(サステナ)ためにも、地域に根ざした文化活動と、文化的舞台となる地域が支え合いかが求められているのです。

地域を元気にしよう！「エコツーリズム」

「エコツーリズム」といえば、旅行を聞いたことがありますか？

これは、自分自身の環境に対する影響を与えないくらいながら自然や文化全体を尊重し、自分の目的の達成にしながら観光として、最近、多くの目的地で集められています。例えば、私たちの住む北海道は、たんさんの自然に生きているひと、小樽の樽や富良野のランターンなどの見どころを見える地図やスケッチなどを置いています。旅行業者が提供する從来通りツアーの人気、「旅館スボルトを訪れる」ことなどによって、環境保全や地域の発展は喜んで受け入れられてきました。ただ、北海道の自然を楽しむ割束ではなく、「豊かな北海道」の自然も歴史も文化

もすべて体感して楽しんで、さらに環境に配慮する。そんな観光を地域が中心となって考えていくことが、持続可能な地域発展には必要だと言われています。

大切なのは、土地の文化や自然を愛すること

地域の文化には、歴史のなかで備つけられたり失われたものも多く存在します。北海道では、これまでアイヌ民族の先住民族としての歴史や文化を充分に尊重しないまま、多く問題をそのままにしてきました。アイヌ民族の歴史や文化を含めて、北海道の歴史や自然を愛し、興味を持って学んで、愛して、後に伝え、さらに創造する。これが、北海道に暮らす私たちにとっての「文化的なサステナ」につながります。レバーヤフットワーカーなどの普普通的・画一的な文化に埋もれがちな、身近な地域文化や文化のサステナ、この機会にぜひ考えてみてください。

6月23日(月)→7月11日(火)

北海道大学はG8北海道開拓塾サミットに合わせて「サステナビリティ・ウイーク」を設立し、持続可能な社会に向けて、シンポジウムや講演などを集中的に開催します。ここにご紹介するのは、学生や市民の方にも参加していただけるプログラム。みんなのためになるとこと一緒に考えませんか？

FRI 6/27 14:00-16:00 一連講座(無料)
開拓シンポジウム「市民がくる和歌と歌と歌アソブ」
ヨコハマにおける持続可能都市と市民社会の別役

SAT 6/28 14:00-16:30 サステナビリティ・ウイーク2008
ワークショップ「ボウル」

SUN 6/29 14:00-16:30 サステナビリティ・ウイーク2008
ワークショップ「ボウル」

MON 6/30 14:00-16:30 サステナビリティ・ウイーク2008
ワークショップ「ボウル」

TUE 7/1 14:00-16:30 サステナビリティ・ウイーク2008
ワークショップ「ボウル」

WED 7/2 14:00-16:30 サステナビリティ・ウイーク2008
ワークショップ「ボウル」

THU 7/3 14:00-16:30 サステナビリティ・ウイーク2008
ワークショップ「ボウル」

FRI 7/4 14:00-16:30 サステナビリティ・ウイーク2008
ワークショップ「ボウル」

SAT 7/5 14:00-16:30 サステナビリティ・ウイーク2008
ワークショップ「ボウル」

SUN 7/6 14:00-16:30 サステナビリティ・ウイーク2008
ワークショップ「ボウル」

MON 7/7 14:00-16:30 サステナビリティ・ウイーク2008
ワークショップ「ボウル」

TUE 7/8 14:00-16:30 サステナビリティ・ウイーク2008
ワークショップ「ボウル」

WED 7/9 14:00-16:30 サステナビリティ・ウイーク2008
ワークショップ「ボウル」

THU 7/10 14:00-16:30 サステナビリティ・ウイーク2008
ワークショップ「ボウル」

FRI 7/11 14:00-16:30 サステナビリティ・ウイーク2008
ワークショップ「ボウル」

カーボンオフセット実施計画

北海道大学サステナビリティ・ウィーク2008 -G8サミットラウンド-



このような森林が除伐の対象となります(今回の対象森林の写真ではありません)

本学では、北方生物圏フィールド科学センターの研究林において、サステナビリティ・ウィーク期間中に排出した二酸化炭素を、森林整備を通して吸収する取り組みを進めています。

サステナビリティ・ウィーク期間中には様々な研究会・イベント、G8大学サミットが行われましたが、これら活動を通して二酸化炭素も排出されました。大きくは空調・電気使用など会場使用そのもの、航空機利用など参加者の旅行に伴うものに分かれますが、サステナビリティ・ウィークの行事で約183トン、G8大学サミットで約166トン、合計約350トンの二酸化炭素が排出されたと計算されます。

京都議定書の下で、日本では森林を整備することが吸収源として認められています。混みすぎて不健全な森林を除伐することによって森林を整備して成長を促進させることができることから、除伐以降の成長を吸収量としてカウントできます。

このルールに依拠して、整備を必要としている人工林に除伐を行い、5年間で吸収されることとします。具体的には中川研究林のトドマツ人工林約1.1ヘクタール、アカエゾマツの人工林約1.2ヘクタール、雨龍研究林のアカエゾマツの人工林約7ヘクタールを2008年の冬に除伐する予定にしており、合計で約400トンの吸収を見込んでいます。作業実行後、モニタリングを続けていき、吸収量が不足している場合は追加的な措置を講じます。

場所	除伐対象面積 (ヘクタール)	樹種・林齢	吸収予想量 CO ₂ トン
中川研究林 音威子府村	0.23	トドマツ 32年生	7.4
	0.82	トドマツ 31年生	26.4
	0.74	アカエゾ 31年生	32.9
	0.49	アカエゾ 30年生	23.9
雨龍研究林 幌加内町	7.00	アカエゾ 31年生	311.3
合計			401.9



<http://www.sustain.hokudai.ac.jp/sw2008/>

□発行

北海道大学

□問い合わせ先

北海道大学「持続可能な開発」国際戦略本部

〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL:011-706-2093 FAX:011-706-2095

E-mail:office1@sustain.hokudai.ac.jp



Hokkaido University

Sustainability Weeks 2008

-G8 Summit Round-



この印刷物は、大豆を使用した環境にやさしい植物油インクを使用しています。